

弔

豊田文一先生がお亡くなりになったという報せに、私は本当に愕然と致しました。実はつい先日、富山県厚生連健康管理部の大浦さんと連絡をとり、17日には必ず先生を御見舞申上げると約束をしたばかりでした。まことに残念でした。後悔先に立たず、自分の煩事に忙災されている身の上を徒らに嘆くのみでした。豊田先生どうぞお許し下さい。

豊田先生は人も知るごとく、日本農村医学会の産みの親の一人です。昭和27年7月長野で第1回日本農村医学会総会に際して、設立準備委員としてその経過報告をなさったのは豊田先生でした。当時先生は、農協高岡病院の副委員長をされておりました。これも周知のことと思いますが、日本農村医学会の発足には、当時の農協厚生連病院の院長たちの大変な協力があったわけです。昭和28年の第2回大会の時、日光でとった理事会の写真に、豊田理事の若々しい顔を今も私は大事に持っています。豊田先生はその後、農協高岡病院の院長となられ、昭和32年には、日本農村医学会第6回学会長も努められました。また、昭和36年には、富山県医師会長になられ、38年には、金沢大学の耳鼻咽喉科の教授に任命されました。かくて先生は、第一線医療の立場からでなく、医科大学の立場からもわが農村医学会を指導協力されることになったのです。

先生はさらに、昭和48年から54年まで金沢大学の大学長を務められました。その間の

辞

先生の私どもの学会に対する意見としては、昭和57年の日本農村医学会誌の「三〇年のあゆみ」に書かれた、先生の所感が大切と思われますのでその「結び」を掲げさせていただきます。

「私は30年の歩みを見つめる時、胸中に去来するものは、その根底に流れるものはヒューマニティであり、それを生み出すものは実践活動であったことである。私は大学で講座を担当し、また、大学の管理運営の責任も負ったが、農村医学の研究で培われたこの理念を、身体から離さず持ち続けてきた。この初心たる農村医学の原点を会員各位も、学会のある限り、持ち続けられんことを期待して止まない。

富山県農村医学研究所長 豊田文一

先生のわが国の農村医学、日本の農村医学会に対する評価はかくの如く厳しいものでありました。今は亡き豊田文一先生、先生を敬慕する私どもの心は計りしれません。日本の耳鼻咽喉科学の大家、金沢大学医学部の逸材、富山県越中のすぐれた文化人、私どものこの上もなく敬愛する豊田先生、先生がお亡くなりになった病院が先生がお作りになったと云ってもいい厚生連高岡病院であったことはせめてもの私どもの救いです。

先生、心安らかにお眠り下さい。蕪辞を以て弔辞とさせていただきます。

平成3年3月18日

日本農村医学会

理事長 若月俊一